

On the Trail of Michinoku's Ghost Paintings A Visit to Hirosaki and Zenringai

TSUTSUMI Kunihiko

In the 33 Zen temples that stand in the Zenringai area of Hirosaki, a great many ghost paintings are preserved. These paintings are not treated as art for aesthetic appreciation, but rather are redolent of the kind of religious paintings that are exhibited to believers visiting temples during the Obon festival of the dead in August. The scroll at Kōtokuin, for example, shows a scene depicting a mother who has died leaving behind a child, and a service for the dead is held for the painting when it is exhibited for Obon.

Two things stand out in the background story of the collecting of these paintings in the Zenringai: the "Obake o Mamoru Kai" (Society for the Preservation of Ghosts) established in Hirosaki City in 1950s, and the figure of its founder, the Abbot of Shōdenji Hasegawa Tatsuon. It was Hasegawa who diligently collected the ghost paintings that left the hands of wealthy farmers at the end of the war, and set them up as temple treasures. The traditions of the Nebuta summer festival in Hirosaki were another reinforcement of the connection between this area and the ghost paintings. In paintings the *dashi* or hook (floats used in religious festivals) of the Nebuta festival are sometimes depicted as design figures in the background *miokuri-e* (paintings depicting seeing off the dead). It cannot be overlooked that ghost paintings were used in the Nebuta paintings as a form of charm to ward off evil. The fact that Shōdenji's Abbot Hasegawa Tatsuon was actually himself a famous Nebuta painter further suggests the connection between the local festival and the ghost paintings.

みちのくの幽霊画を歩く——青森県弘前市禅林街を訪ねて

一、弘前の幽霊画事情

青森県弘前市の幽霊画をめぐるのは、新編弘前市史特別編『弘前の仏像』（一九九八）に六ヶ寺十二点の画像と法量などのデータがそなわる¹⁾。また、それらの一部は青森県立郷土館『妖怪展—神・もののけ・祈り—』の図録（二〇〇九）にも掲載されていて、この地域の幽霊画の全貌をつまびらかにしている。現在、『弘前の仏像』で紹介した掛幅の大半が弘前市で毎年開催されるギャラリー森山の「ゆうれい展」に一般公開されるようになっており、弘前ゆかりの作品を目のあたりにすることができる。

ところで、ギャラリー森山の「ゆうれい展」に出展される幽霊画の所蔵者に注目してみると、そこには市内西茂森の通称・禅林街の諸寺が名を連ねる。禅林街とは、江戸初期に弘前藩主により領内一円から集められた曹洞宗寺院の集団建立地で、並木道に沿って三十三の禅寺が境内を接する。この場所にあまたの幽霊画が伝存するのは、どのような事情によるものなのか。地域史にたちあらわれ、寺と死者画像の交絡について考えてみよう。



図1：ギャラリー森山「ゆうれい展」



図2：禅林街

二、禅林街の諸作

各寺院の幽霊画のなかでも、ことに目をひくのは、岩木山麓の久渡寺に伝わる円山応挙筆「返魂香之図」を模写した美人画風の無足幽霊図である。鳳松院（図3）、川龍院（図4）の掛幅は、いずれ

堤 邦彦



図3：鳳松院

も久渡寺本と同じ構図の絵相であり、弘前領内において「応挙作」の模写が流行したことをものがたる。じつはギャラリー森山の出品作品には、二〇一五年に画かれた橘鶴泉作の「久渡寺幽霊図」(図5)もあって、今日にいたるまで久渡寺本を手本にした幽霊画の模写が行われているのが分かる。ちなみに二〇一七年八月の「ゆうれい展」に出ていた青森県黒石市の黄檗宗・法眼寺の絵(図6)も同系統の幽霊画であった²⁾。

応挙作を名乗る点では、禅林街・正伝寺の一軸(図7)は落款をふくめて手の込んだ模写のあとがうかがえる。すなわち画幅の左下に「平安／天明丙午仲冬應舉印」とし、さらにその隣に「嘉



図4：川龍院

永四^辛亥 弥生三日夜写之／香雲○史」とあるので、嘉永四年(一八五二)に天明丙午(六年・一七八六)に画かれた原画より写し取った経緯を推測しうる。一説に井伊家のお抱え絵師・川崎千虎(一八三五一―一九〇二)による模写ともいわれるが³⁾、詳細はよく分からない。

さて、多彩なバリエーションの幽霊画を伝える禅林街のなかでも、特に収蔵点数の多いのが黒門口にほど近い藤先寺である。当寺の五点の掛幅のうち、紙本墨画の二点(図8)は比較的新しく寺の什物に加えられたもので、現住職の古川道雄師が表装しなおしてギャラリー森山に展示したという。これ以外の三点はいずれも紙本墨画淡



図6：法眼寺



図5：橘鶴泉作の模写本



図7：正伝寺

彩で、図9・10の二幅には「東雅」の印がみえる。また図11は、表具上部の銘と裏書きから献納のいきさつの判明する一幅である⁴。

〔上部銘〕

廿九世代施主津田仙庵三軸之内幽霊之像

〔裏書き〕

安政四丁未年

為 故学院仙茂良伯居士菩提

六月廿四日

俗名津田仙庵茂良



図9：藤先寺・東雅作



図8：藤先寺の二幅（墨書）



図11：藤先寺・安政四年



図10：藤先寺・同

嗣子同苗玄平尚賢

津田仙庵は藤先寺の檀家で藩内の医師であった。安政四年（一八五七）六月二十四日に仙庵の菩提をとむらうため、この絵が藤先寺に納められたのである。

現任職の古川道雄師によれば、以前は他にも沢山の幽霊画が伝存し、夏のお盆の折に人目につかない所で供養していた。しかし、昭和一〇年の本堂再建時に多くが紛失してしまい現在にいたったという。

三、死者凶像との対話

ところで、禅林街の寺々が夏の盆に際して幽霊画の供養を行うところ、どの様な宗教的な意味をもつのか。絵が描かれた由来は、今日いかにして語られ、寺を訪れる人々と寺宝の幽霊画を結び付けているのだろうか。そのあたりの事情を知るため禅林街・高德院に伝わる掛幅（図12）について触れてみたい。女霊を描いた紙本墨書の一軸をめぐる母と子の哀話が、弘前の郷土資料に古くからの民話として引かれている。『ころろ 津軽のお寺さん巡り 弘前篇』

（二〇〇一）より口碑の内容を抄出しておく。

無信心なしゅうとめにいじめられた嫁が、生まれたばかりの赤ちゃんを奪い取られ実家に帰される。この嫁は間もなく世を去るが、あの世へ行っても嫁はわが子のことが苦になつて浮かばれない。夜な夜な皮ばかりのしなびた乳房を抱え、音もなく現れて子供をあやして行った。

意地悪なしゅうとめは赤ん坊が泣けば、カタコトカタコトと外から足音が聞こえてくるのを不審に思い、外へ飛び出してみるのがだれもない。そして足音がするたびに、赤ちゃんも泣くのをピタツとやめる。しゅうとめが恐る恐る子供の部屋をのぞいて見たところ、そこには自分がいじめ抜いた嫁のうらめしげな姿があった。しゅうとめは「悪かった」と悔い改め、この姿を画家に描いてもらったのだという。

幽霊の子育てじたいは江戸怪談に散見する常套テーマである。浅井了意の『伽婢子』（寛文六年・一六六六刊）巻十三の二「幽鬼嬰児に乳す」はその一例といえるだろう。そのような既視感の強い話柄を土地に伝わる嫁と姑の話にからめたのが、高德院の掛幅由来とみてよい。

一方、怪談文芸史に占める位相とは別の視点で特に注目すべきは、高德院の幽霊画が現在の盆行事のなかに組み込まれ、先祖供養に訪れる檀信徒のすぐ隣で嫁の哀話を語る証拠の什宝となっている点である。二〇一七年の盆の法会の折、寺族の方より次のような話を拝聴することができた。

幽霊画はもともと檀家の所蔵であったが、寺に納められしばらくそのままになっていた。前任職の代（二十年程以前）に何やら不運が続き、仕舞ってある掛図のことを思い出して盆に供養するようになった。現在は八月十三日に開帳し、住職の三上陸仙師が読経をす



図 12：高德院の幽霊画をまつる風景

るといふ。参拝をすませた檀信徒でにぎわう書院の余間に母幽霊の掛幅が掛けられ、香花を供えるのである。

二、三年前に軸装を新調したという掛幅の前で三上住職の御母堂は、檀家と幽霊画のかかわり方について興味深い話を語ってくれた。

絵のお嫁さんは外に出してもらいお参りの人達と交わるのを喜んでいます。だからわたしも絵の前に座って心をかよわせることにしています。

寺に伝わる幽霊画（モノ）とその由来（コト）が、単に過去の遺物としてではなく、寺詣での人々との精神的な交流へと発展し、高德院の檀信徒のあいだに身近かな宗教伝承を根付かせるのである。しかも、それが年に一度、先祖の魂を迎える盆行事と時間・空間を共有する点は、信仰の場に掛かる幽霊画の意味を考えるうえからも見逃せない事象といえるだろう。

盆の精霊会に際して、東北各地の寺院が六道絵や十王図などの冥府図を公開することは珍しくない。その際、それらあの世の図様とともに幽霊画の開帳がしばしば行われたことは、すでに論じたとおりである⁵。死者との交流を大切にする風土的な要因も大いに関係しながら、盆の時空の一端に幽霊画の由来が語られている点は注目してよいだろう。

四、正伝寺と「お化けを守る会」

禅林街の諸寺に幽霊画の集まる事情とは、いったいどのようなものであったのか。これだけ多くの掛幅が諸寺の宝物となつて今日にいたつた背景に、何らかの人為的な原因があつたことは想像にかたくない。

禅林街と幽霊画の密なかかわりを示す出来事に、昭和五〇年代の弘前を舞台とした「お化けを守る会」の活動と、それを支えた正伝寺住職・長谷川達温（一九二一〜八九）の足跡が思いおこされる。

弘前市新町の浄土宗・龍泉寺は津軽藩のお抱え絵師・福島晃山が描いた幽霊画の所蔵で知られる。現住職の福士道弘師は達温師と親交のあつた人物であるが、今回、正伝寺の幽霊画に関して興味深い事情をお聞かせいただくことができた。

もともと正伝寺は幽霊画を持つていたわけではなかつた。ところが、戦後間もない昭和二十年前半の混乱期に、その当時食堂を経営していた三上某のもとにあつた五十点ほどの絵のなかから何点かが正伝寺の所蔵に帰した。三上某は岩木町出身の豪農で、敗戦を機に商売に転じたのである。津軽地方では富裕層の蔵に魔除けの幽霊画を置く風習があつた。あるいはそうした除災の目的により集められた絵が、戦後の農地開放で没落した豪農の手を離れ、寺の什物に

移管されたのかもしれない。

一方、寺院サイドのさらなる幽霊画収集と一般公開に拍車をかける動きが昭和五十年代の弘前にわき起こつていた。



図 13：正伝寺の幽霊供養祭（『妖しきめるへん』）

昭和五十二年前後に蘭繁之を中心として発足した「お化けを守る会」は、年二回の会誌『妖しきめるへん』の刊行（一〜十三号、一九七七〜八三）とともに、怪談落語・講談の会の開催や、妖怪変

化にまつわる実地調査、妖怪画の展覧会といった幅広い活動をおこなった。そのような日常企画とあわせ、同会はメンバーの親睦をかねて毎年秋の彼岸過ぎに正伝寺に参集し、本堂に掛けた幽霊画の供養を行なっている。達温師の読経にはじまり、珍しい絵のスライド上映のあと、精進料理を楽しみながら怪談話に興じたという。昭和五十六年十月四日の親睦会の様子を川村廣子「幽霊供養祭」(『妖しきめるへん』八号、昭和56、3)より引いてみよう。

本堂壁面三方を使って青火を放つ幽霊画がぞろりと掛け流される。遠くから眺めたり、傍まで寄って行つて見たりしている。やがて達温師が金色まばゆい法冠法衣で現れ、おつとめをされる。おつとめが終わってからの法話がまたしみじみと身に沁みる。幽霊はいるかないのか、ではなく、みんな心に怨みつらみを抱いて、せん方なくいきているのであり、思いを此世に残して死出の旅に立たねばならない。(中略)

久度寺の例の丸^(ママ)山応拳と言われる美人の幽霊画の写しをはじめ、各氏が供養の為持ち寄せられたもの(主催者などは一人で十本近くも)が、まだずらりと掛け流されたままなのである。

正伝寺に持ち寄せられた幽霊画の前で達温師の法話に聞き入る会

員諸氏の雰囲気がよく伝わってくる。文章に添えられた写真(図13)には、正伝寺の掛福はもとより、いまでもギャラリー森山に出版される藤先寺などの寺蔵幽霊画十数点が確認できる。まさに現在の「ゆうれい展」の原型をうかがうことができるだろう。

さらにまた、「お化けを守る会」のメンバーには、怪談や妖怪画に関する研究書、画集の出版にたずさわる人々もあつて、昭和末期の弘前にお化けブームをもたらしたのである。正伝寺の達温師がまとめた『怪談豆本 津軽怪談』などは、当時の流行色ものがたる郷土資料といえるだろう。幽霊画の町・弘前が生まれた背景に、地元の怪談文化を見直し、世に弘めよとする「お化けを守る会」の積極的な活動が深く関与していたことは間違いない。

五、ねぶた絵と幽霊画

禅林街・正伝寺のケースをとりあげるとき、別の角度から考えておかなければならないのは、達温師自身が弘前を代表するねぶた絵師として活躍していたことである。この事実はねぶた絵と幽霊画の接点を大いに想像させる。

青森や弘前の各町内では、毎年お盆を迎える季節になると、雄大なねぶたが町にくり出す。東北を代表するねぶた祭りのなかでも、



図14：ねぶた見送り絵の幽霊
 (路上社『弘前ねぶた速報ガイド2008』より、絵師・三浦香龍)

弘前の扇ねぶたは表側の「鏡絵」に躍動感あふれる豪快な武者像を配するのに対して、裏側の「見送り絵」には優美で妖艶な美人画を描くのが基本である。「動」に対する「静」を重んずる伝統は現代にあっても昔ながらの表現をみせている。



図15：ねぶた見送り絵の「菊花の約」
 (同上)

裏側の見送り絵の場合、その図柄は中国風の唐美人にまぎって、生首をぶら下げた凄惨な絵や、幽霊の妖しい姿まで描かれることがある。図14、15は二〇〇八年『弘前ねぶた速報ガイド』に載る「幽霊」の見送り絵である。大正から昭和にかけて、こうした妖鬼の絵相が好んで扇ねぶたの裏側を飾ったことは、ねぶた絵師の顔をもつ達温師の幽霊画収集と無関係ではないように思われる。達温師自身が、折りにふれてねぶた絵と幽霊画のつながりに言及していたとの伝聞はそのことを裏付けるからだ。

さらには、弘前ねぶた中興の祖と呼ばれた石沢龍峽（一九〇三―一九八〇）の出自が禅林街・藤先寺の寺族であることも、ねぶた絵

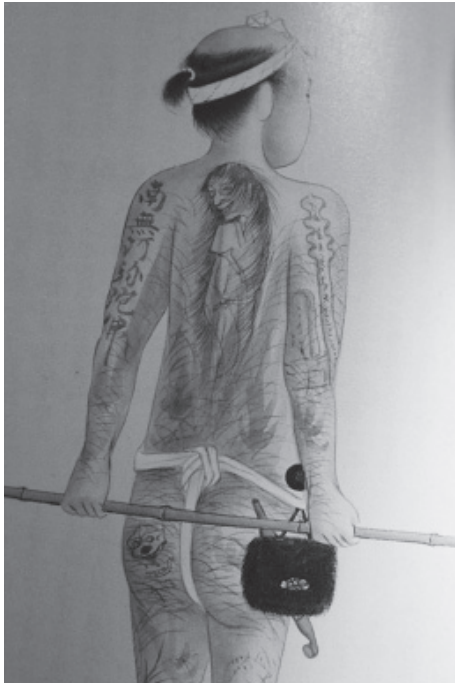


図 16：『人物画帳』より

と幽霊画の浅からぬ親和性をうかがわせる。生涯に四〇〇台ものねぶた絵を描いた龍峽は、中央画壇に名を残した津軽の日本画家であり、仏画の秀作を数多く手がけている。

一方、龍峽、達温らの活躍した昭和中・後期のねぶた絵は、その画風に江戸時代以来の妖艶かつ醜怪な血みどろ絵の伝統を色濃く受け継いでいた。美術史研究の須藤弘敏によれば、「昭和三〇年代のねぶた絵は鏡絵ももつと殺伐として荒々しかったりグロテスクだったりしていた」という。たしかに『三国志』などに題材を求めた血生臭い合戦絵の世界は、幕末・明治期の幽霊画が表現した退廃的な残酷美に通底するものであった。見送り絵のなかには、溪斎英泉

(一七九一〜一八四八)の「生首をさげる女霊」(福岡市博物館蔵)を模写したと思われる構図のもの(図14)もあり、江戸浮世絵の怪異描写に対する強い関心がうかがえる。

なお、やや広汎な庶民文化史の流れに比べていえば、ねぶたの紙背に幽霊や鬼女の見送り絵を配置する行為は、前近代の世俗に流行した(妖魔を描いて妖魔を防ぐ除災民俗)の考え方と通底するのではないだろうか。鬼を画いた絵馬によって家内安全、無病息災を願う埼玉県・鬼鎮神社の事例などは、鬼による魔除けの典型であった⁹。

幕末の日本を旅したシーボルトはお抱え絵師の川原慶賀に命じて街道の風俗を克明に描きとめている(『人物画帳』)。そのなかのひとつの図絵には、大河の渡し場に佇む川越し人足の背中に女の幽霊と墓原の刺青が彫られていた。醜怪な幽霊の絵は、命がけの仕事から身を護る聖なる呪符にもなるのである。体の後ろ側に幽鬼の姿を彫りつけて魔払いの効能を期待した、江戸庶民文化の一断面をものがたる渡し場の風景といつてよいだろう。

そもそも民俗文化社会にあつて「うしろ」は見えない世界に通ずる境界の場とされることが少なくない。寺社の本殿の背後には「後戸」^{うしろど}と呼ばれる場所があり、そこには異形との接触にまつわる伝承がひろく語られていた¹⁰。背中を人体の後戸とみるならば、そこに妖魔を彫り付けて邪を祓う発想が容易に考えられたことも大いにありう

るだろう。

このような事例に引き比べて考えるならば、ねぶたの後ろ側を飾る見送り絵に、幽霊画の負のパワーを逆転させて用いる行為は、「うしろ」の民俗や魔除けの伝統心意と、遠くない関係にあるのではないだろうか。

話を弘前のねぶた絵に戻す。

昭和の幽霊画ブームが禅林街・正伝寺を拠点として弘前一円にひろまった背景に、ねぶた絵に凝縮された津軽の文化特性の影響がみえかくれする点はいなめない。言をかえていえば、それは短い夏の到来を実感し、盆の季節感にひたる祭礼の場と死者図像の不可分の交絡を意味している。

かくしてみちのくの城都・弘前に幽霊画を愛でるさいはての民衆文化が華開いたのである。美術鑑賞のためのミュージアムとは質の異なる異形との交点が人々の日常生活の場に広く浸透していたことは間違いない。

注

- (1) 幽霊画の他に藤先寺の断首図二幅を含む。
 (2) この他、黒石市の黄檗宗・葉師禅寺にも作者不明の幽霊画一幅がある(「つがるのお寺さん・下」一九七七、東奥日報社)。
 (3) 『妖しきめるへん』一号、一九七七・六。

(4) 新編弘前市史特別編『弘前の仏像』(一九九八) 251頁の解題による。

(5) 堤邦彦『みちのく幽霊画紀行』(別冊太陽『幽霊画と冥界』二〇一八・七)

(6) 青森県立郷土館『妖怪展 神・もののけ・祈り』図録(二〇〇九) 所収「コラム お化けを守る会」59頁。

(7) 弘前市商工観光課『弘前ねぶた歴史とその制作』一九八二。

(8) 後藤弘敏「ねぶた絵論」(『津軽の花弘前大学所蔵ねぶた絵全作品集』二〇〇四、弘前大学出版会)。

(9) 山名伸生『小絵馬と木馬』(京都民芸資料館・秋季特別展「絵馬」図録、二〇一八)

(10) 橋本章彦「うしろのこと―ぞくぞくする霊的な空間」(『異界百夜語り』(二〇一四、三弥井書店) 26頁)